

「人工知能（AI）と人間」

北海道長万部高等学校長 濱田 哲也

人工知能（AI）という言葉が初めて世に知らされたのは、1956年に開催された国際的な学会だ。AIは Artificial Intelligence の略でその学会では大まかに「知的な機械、特に、コンピュータプログラムを作る科学と技術」と訳されていた。現在では一般的に「人間の知的ふるまいの一部をソフトウェアを用いて人工的に再現したもの」と訳される。

人工知能（AI）は、技術水準が向上し、既に様々な商品やサービスに組み込まれて活用が広がっている。身近なところでは、インターネットの検索エンジンやスマートフォン音声応答アプリケーションである米アップルの「Siri」、Googleの音声検索や音声入力機能、掃除ロボットなどが挙げられる。最近では首都圏だけでなく道内でも飲食店で配膳ロボットが活躍している。客がタッチパネルで注文すると配膳ロボットが料理を運んでくる。新型コロナウイルス対策のため非接触であり人手不足解消に役立った。ある店では商品の宣伝や客の案内、歌を歌う機能もプログラムさ

れており今後活用する予定だ。そういえば今年の見学旅行のホテルの受付はすべて恐竜ロボットだった。

ロボットといえば、今後「お節介ロボット」が活躍するらしい。人間と同じ大きさ、会話もでき自由に動ける。家族の一員として居住し、ロボットが人間の生活をサポートする。厄介なのはお節介が過ぎることだ。このロボットは朝から「おはようございます。さあ歯を磨きましょう」から始まり、「体調はどうですか、朝食を食べたら薬を飲みましょう。」「今日は寒くないですか。温度調節ジャケットを羽織ったらどうですか。」と口うるさい。もちろんお節介レベルも調節できるのだが。

高齢化社会はますます進展する。医療が発展したため寿命は延伸する。高齢者は健康ボディを手に入れ多趣味となり登山を行う。AIがあらかじめその人の体力や好みに適した山を選択し、天候や気温、風、景色、登山道の状況などを見極め最適な日時を指定する。当日は補助アームや補助レッグ、体幹のバランスをとる補助デバイスが機能し転倒しないよう自動制御してくれる。それでもお年寄りは無理な登山を行い転倒し、崖から滑落する。「あっ、もうだめだ!」と思った瞬間

間、「ドスン！」誰かが崖の下で受け止め助けてくれた。お節介ロボットだ。心配しなくて後をつけて来ていた。お節介レベルを30xにしていた良かった。

AIは医療をも席卷する。地域住民の医療データが高度医療サービスセンターに保管されている。バイタルデータは日中も睡眠時もAIが管理する。検査はすべて医療ロボットが行う。臓器不全等重篤な疾患の患者には必要な機能をもった細胞を移植する。AIがすべて診断を行い、オペはAIの指示で人間またはロボットが行う。やがてAIはAIのオペも行うようになる。

これまでの話を踏まえて皆さんに伝えたいのは、① AIの時代に自分自身が主体性をもって生き抜くこと、② AIにはない人間の良さを追究すること、である。間違いなくAIの時代は一層進化する。世の中は便利になり物質的には豊かになるが、人間としての生き方や心の豊かさなどは果たしてどうなっているのか。人と人のつながりが今まで以上に希薄になるのか、困難に直面した時お互いが助け合い励まし合う関係になっているのか。

AIを作り出したのは人間である。将来、人間が人工知能(AI)に支配されることにだけはなあってほしくないと思う。

—